

質的研究の三つのジレンマ ——「再詳述法」の提案による質的心理学の可能性

無藤 隆 白梅学園短期大学
Takashi Muto Shiraume Gakuen College

要約

質的研究を進める際に、特に専門的な実践者が作業する現場においては、研究者は少なくとも三つのジレンマに出会う。つまり、無知のジレンマ、記述のジレンマ、そして協同のジレンマである。特に第三のジレンマに焦点を当て、新しい研究方法論である「再詳述法」を提案する。ここでは、実践者が頼る中心的な概念を吟味するのだが、それを彼らの用いる記述言語を採用し、だが、その概念のための言葉は使わないようにする。この手続きを通して、その概念を構成するものは何かを見出し、そのことから理論的な枠組の変更を行っていく。質的な現場研究では、実践者と研究者の協同的な関係が研究過程の中核の根底となるのである。

キーワード

質的研究, ジレンマ, 再詳述法, 現場, 実践者と研究者の関係

Title

Three Dilemmas of Qualitative Research: Possibilities of Qualitative Psychology through 'Re-Description Method'.

Abstract

In conducting qualitative research, especially in the field professional practitioners work, researchers encounter at least three kinds of dilemmas; dilemma of ignorance, description, and collaboration with practitioners. In the present study, we focus upon the third dilemma. In qualitative field research, since collaborative relationships between practitioners and researchers underlie the core of research process, dilemma in collaboration must be settled. We propose a new research methodology, 'Re-description method,' to address it. In the re-description method, researchers examine central concepts on which practitioners base for their practice. In examining a concept, we record practitioners' descriptive language but with paraphrasing the exact words that practitioners use to describe the central concept. This procedure enables researchers to identify what constitutes the central concept, which leads to revision of a theoretical framework.

Key words

qualitative research, dilemma, re-description method, field, relationships between practitioners and researchers.

質的な心理学はなぜ必要であり、いかにして可能なのか。それは既に多くの専門書やテキストで論じられてきた。質的研究と量的統計的研究には、各々、得意な点があり、独特のあり方を持っている（その整理は、既に多くの方法的入門書・専門書に展開されているが、例えば、無藤ほか（2004）などを参照）。さらに、従来の量的統計的な研究が持つ限界への批判も展開されている。何より明確に、グレイザー&ストラウス（Glaser & Strauss, 1967）が、量的な方法が対象のリアリティから遠ざかり、抽象化されすぎてしまうために、質的な方法を通して、リアリティに関わり経験的に意味のある記述や説明や理論を提供すべきだし、提供可能であると論じている。また、デンジン&リンカーン（Denzin & Lincoln, 2000）は、質的方法の浩瀚なハンドブックの序文において同種のことを大きな展望の下で簡潔に整理している。

以下、それらで指摘されていることの要点を「ジレンマ」という形で示したい。それは、質的研究が、従来指摘されてきた量的な研究の持つ難点を同様に持つのだが、しかし、質的研究こそがそれらの難点にいわば正直に向き合い、取り組んでいるという私の考えからのものである。その上で、私が自分自身の研究の方法論として進めている「再詳述法」の提案を行い、それが、質的な研究におけるもう一つの重大な論点である、現場の実践者と研究者の関係から生じるジレンマに向き合うためのものであることを論じたい。

既に、ハマーズリー（Hammersley, 1989）は、まさに「ジレンマ」を表題に附した著作で、質的な研究方法の持つ根本的なジレンマを、現実の姿を科学的に忠実に反映するという主張と、理解と理論を生成するのは創造的で解釈的な過程であるという主張の対立に求めている。この科学性ないし現実忠実性と構成性のジレンマから、以下に述べるジレンマも派生しているとも言えよう。

こういったジレンマに向き合うことには、それがジレンマである以上、根本的な解決策はないのだが、しかし、具体的な研究においては、ジレンマに取り組むつつ、新たな知見を得ることは常に可能である。また、そのジレンマを避けては、質的な研究を進める意義は乏しい。その意味で、ジレンマを明確にし、その一つ一つにいかに対処するかの種類の方法論と、またその

隘路を進めて得られる成果を示していくことこそが、質的な心理学の将来であると考えてるのである。

1 質的研究における現象の記述をめぐる 二つのジレンマ

質的研究につきまとう基本的なジレンマがある。それは、あらゆる心理学研究にとって生じているはずであるが、量的な方法を取る限り、ジレンマの存在自体に気づきにくい。質的な研究はそのジレンマに直面する。それがまさに質的な研究の成り立つところであり、必要であるゆえんである。（とはいえ、以下の量的対質的の対比は、実際には、多くの中間領域を含んでおり、そこでは入り交じった特質を持つであろうが。）

第一のものを「無知のジレンマ」と呼ぼう。我々は、対象についてよく知らないから調べようとする。調べるためには対象の現象をよく分かっていると、調べるための方法的工夫は出来ないし、理論枠組も作れない。そこで、対象に近づき、詳細に記述しようとする。しかし、何も知らないことを記述し、調べることは無理である。つまり、無知の対象を研究するためにはその対象を前もって分かっていたなければならない。（もちろん、これは、プラトンの「メノー篇」以来の、つまり新たに知ることは出来ず、知は既に知っていることを思い出すことに他ならないといったジレンマの変形であり、つまりは認識が持つ根本的な自己撞着的特質なのである。）

通常、量的な研究は、そのジレンマを、先行研究群からの知見とパラダイムの確保により解決する。あるいは、時に「予備調査」という形で根拠の明瞭でない知見を導入する。先んじた理論や知見があり、新たな仮説はその調整や修正として生まれる。それに対して、質的な研究は、現象自体を詳しくとらえ、その上で理論を見直し、あるいは新たに考え、再び、現象に戻り、記述を重ねていくという循環過程を通して、実質的な解決を図る。そのやり方は、我々が当該の現象について無知であることを正面から引き受け、その誠実な記述から始める点で、ジレンマへの正統的な対応なのである。

第二のジレンマを「記述のジレンマ」と呼ぼう。記述は理論と概念を前提にして、既にある研究共同体あるいは先行研究で使われている用語を用いて行う。その用語に含まれる概念を疑い、理論を変革しようとしたときに、その記述以外の用語体系を採用することになり、そもそもその概念とのつながりを失う。しかし、元々の記述に使われる用語体系を使い続ける限り、前提的に含まれる概念を疑うことは困難になる。(これは、記述の理論的負荷性の一つの形に他ならない。)

ここでもまた、質的研究は、循環的な漸進を選択する。少しずつ記述の用語を変更し、またそれに伴い、理論を動かしていく。それはまた、単純な用語＝概念と現象との一対一的な対応を信じないことでもある。記述が現実の現象をうまく表していないと思うからこそ、概念を疑うのである。量的な研究は、既存の用語体系をさらに積み重ねていく。その概念を疑うのはごく部分的に止まり、研究の積み重ねからその体系の鍵概念の検討や用語体系の根本的な変更を必要とするまでに至ることは難しい。そこに現象との関係が入りにくいからである。

2 研究者と実践者の関係から派生する 第三のジレンマ

実践的専門家の活動と記述をさらに研究者が記述し検討することから生じるジレンマがある。「協同性のジレンマ」と呼ぼう。第二の「記述のジレンマ」の発展型であるが、実践的専門家が、その現象に実践的に関わるだけでなく、独自の専門的記述体系を、それがあまり整備されていないにせよ、作りだし、日常的に用いている場合の問題である。そのような場合、研究者は実践者の用語と無関係の用語を採用しても、実践者と話が通じないだけでなく、当該の現象の理解そのものが困難である。実践者は自分たちの用語と概念のあり方に沿いつつ、活動を構成しているからである。研究者は実践者に沿っていくことで研究を可能に出来るが、そのことでかえって実践に対して独自の視点を持って研究面から寄与することは難しくなる。しかし、研究者独自の体系にもとづく視点に立つと、その活動

を実践行為としてとらえること自体が不可能になる。

そこで、研究者の用語と実践者の用語は重ねていかざるを得ない。研究者がその各々の学問を背景としてその用語や概念を持ち込むとしても、実践者の用語と概念の中に入れ込み統合を図ることで対話的關係を作り出すことができる。つまり、研究者は、既に現場での実践者が記述していることを実践者が行うのと絡めつつ自らの記述を行い再検討するのである。

例えば、筆者の専門である保育現場の研究のように、専門家がその場を構成し、かつ研究者の論述もしばしばその専門家と共有した概念枠組を用いている場合、対象の把握はその概念記述と重なり、相互補完し、相互強化してしまう。そこでは、概念記述の変換や場のあり方の変革が難しくなる。その一方で、研究者の記述と現場の中の専門家の記述がまったく無関係であると、相互にその議論が成り立たず、共同による現場の変革は困難である。現場の実践者の「智慧」に研究者が学ぶことも難しくなる。研究者の研究の中身を理解して、役立ててもらうにもハードルが高い。

保育の実践にあつてはその現場独自の枠組を持たざるを得ない。それが現場のあり方を基本的に規定し、また、そこでの考え方を限定している。それを疑うにしても、何も無いところからは、保育の現象として当該の現象を記述することすら困難である。保育の実践に関連したいとすれば、保育場面の現象はそこでの記述言語を部分的にであれ、採用せざるを得ない。その記述は、どうしてもある種概念枠組を招き入れることになり、その概念枠組自体を検討したいと考えたと、具合が悪いが、しかし、その記述の仕方を採用する以外に、記述を進めることは出来ない。

またそもそも、保育・教育などの分野は、研究者の用語や理論付けが、行政的方針や大学の養成や研究者による助言や執筆活動を通して、実践現場での用語にかなり入り込んでいる。また、実践者から研究者に転じるものも多く、研究者の用語と実践者の用語の相互の入り込みを強めている。(保育分野でのこのような特質が特に日本において顕著であることについては、無藤(2003)において論じられている。)

3 質的研究法としての「再詳述法」

特に第三の協同性のジレンマに焦点を当てて、再詳述法を提案したい。その具体的な展開は、無藤（1997）において行っているが、まだその段階では、研究者と実践者の用語・概念の関係について明瞭に対象化して論じていなかった。

一つヒントになるのが、研究の妥当性について、アイズナー（Eisner, 2003）が論じている点である。彼は、従来から、科学的研究と芸術的活動の重なりを主張してきているが、その観点から研究の知見の妥当性を三つの軸によりとらえている。一つは、「構造的妥当性」であり、様々なデータから同一の結論が示唆されることで妥当とする。第二は、「指示的妥当性」であり、その状況がどうであるかがよく読み手に伝わるかどうかで判断する。第三は、「合意生成的妥当性」であり、各々の読み手の解釈が新たな意味を生み出すかどうかでとらえる。

これらを、研究者・実践者の関係に置いてみるならば、互いにデータから結論を読み取ることが出来、また、その指し示すものが何であるかを各々に了解でき、さらに、各々の立場から新たな発見と意味をつかみ出せることである。そのためには、研究者側のみならず、実践者側の実践と理論への展望が問われるし、合意形成が成り立つためには、互いの記述と概念の体系の重なりが不可欠である。

再詳述法では、研究者は実践者と協同しつつ、相手の概念と用語を採用して、現象記述を行い、また理論化する。同時に、そこに研究者の概念と用語を入れ込んでいく。また特にそこで特定の概念の意味について再検討を行うことを主眼として、その概念に基づく記述を中断し、別の用語を持ち込んで記述を試みる。そのことを通して、その概念の再検討を行い、その概念が何を指し、また何を意味しているか、さらに他の概念との関係が何かを再吟味する。（その具体的な手続きは後ほど例に則して述べる。）

ここでは、当該の現象の豊かさ（それが何であれ）を伝えられるかどうかデータ記述の要となる。その上で、解釈の妥当性の検討を通して、現象とその従来

の解釈自体に新たな見方を生成するのである。その新たな見方が成り立つには、概念を疑うことが不可欠である。だが、その疑うべき概念は記述のなかで用いられるものである。その現場の実践者の記述の仕方とまったくつながりの切れている別な体系を持ち込んで記述して、現場の実践者の体系による記述をまったく言い換えてしまう方策を採用してはいけない。だから、概念は常に記述に回帰しつつ検討される螺旋的な循環過程において検討されるのだが、しかし、あえて特定の概念（ここで検討すべき概念の数は多数にはなり得ないが、その数自体は問題ではない）を使わない記述を研究者は導入して、その検討をさらに明瞭にするのである。

その研究における記述は対象となる人たちにより、その現場で実質的な標準として用いられる記述であり、概念である。その場とそこでの活動をとらえる枠組の核として機能している。また、その概念は既にある程度、研究を基礎としているという意味で理論的なものであり、これまでの研究が実践から展開されている点で距離が近い。例えば、保育の世界の場合、研究者の考え方が入り込んで形成され、また実践者が研究者に転じることで、実践的概念が研究的概念へと洗練されている。例えば、「環境」といった用語は現在の幼稚園教育の中核にあるが、それを、文字の獲得に即して「文字環境」として、具体的に整理するなど、後ほども挙げる、子どもが保育現場での活動で文字を用いる例などから、子どもの作り出す環境ということのよい事例となっている。研究者の概念と実践者の概念の距離が近く、かつ相互に影響し合っているのである。

しかし、これらの吟味されるべき概念が実態として何を指しているかはしばしば曖昧である。ある概念とある概念の間の検討もあまりなされていないと思われる。だからこそ、研究をしたいと問いを立てるのである。だが、実態はそれとして確定できず、記述と概念と循環してとらえられるものである。

簡明に手順として述べてみよう。詳細な行動記述を、特定の概念に関わる用語を外して行ってみる。そこで新たに行った記述が示す活動の様子を、吟味すべき概念の具体的な姿として考え直す。（客観的な行動記述というわけではない。当の概念に変えて別なものを使うからである。ただ、より行動に近いところの記述を

重視する。)今、記述に用いられる概念がN個あるとする。その内の一つ(ないしいくつか)の概念を用いずに、現象を記述し、解釈する。これは単純にし過ぎているが、この方法の核をとらえた言い方ではある。実際には、ある概念とある概念の間には関連があり、概念と現象との間にはそもそも創造的解釈過程があるのだから、ある概念を外すとは、他の諸々の研究過程に様々な違いをもたらす。ひいては、記述と解釈過程全体に変容をもたらす。それがどの程度のものとなるのか、その結果、何が新たに生まれるかということは、試みてみないと、分からない。だが、その成果にこそ、この方法の目指すところがある。研究者にとっての枠組の変容を目指すと共に、実践者にとっての見方の変容を可能にするのである。

簡単な例を挙げよう。幼児教育のある解説書に、「文字は教え込むのではなく、遊びを中心とした生活を通して、幼児自身が環境のなかから自分で選び取って取り入れていく過程を大切にしましょう」(無藤, 2004, p.103)とある。「遊び」、「生活」、「環境」、「選び取る」、「過程を大切にする」など、多くの保育者にとっておそらく理解可能なことだし、いかなる活動や指導を指しているかはある程度了解されるはずである。だが、その一つ一つを疑い、吟味し直すことが可能である。そして、その研究を通して何か新たな記述と概念の体系、そして実践への示唆が生まれる可能性があるだろう。

研究の手順としては、まず、研究課題として実践者による関連する記述を取り出す。例えば上記の文が該当する。それが指し示すであろう実際の子ども・保育者の活動を観察する(研究によっては面接する)。「遊び」、「生活」、「選び取る」などの実践の鍵となる概念と用語を使わずに、記述を試みる。つまり、再詳述を行うのである。子どもの動きや表情などをおそらくもっと細かく、しかし、日常の言葉を使って記述するだろう。例えば、「子どもがレストランごっこでメニューを書き、『はんばあぐ』と記した。途中で、書くのを止めて、隣の子どもを見ると、その子どもがうなずき、また書き出して完成した。隣の子どもが『「あ」ではなくて、「ぼう」を書くんだよ。』と言ったが、無視した。」という具合である。そうした活動の記述が数多く積み重ねられる。その後、量的にも質的にも

様々に分析される。それを通して、結果の考察を行う際に、最初の問題設定に戻り、解説書の文にあるように、子どもの書く力の発達と指導において、「遊び」や「生活」とは何を意味するのか、またそこでの「自発性」とは何であるのかを検討することになる。

4 質的方法の基本に照らして

自明とする文化の中での概念を再検討し、自明性を覆して、文化的特殊性を明らかにするのは、まさにエスノグラフィーの特徴である。特に、身近な文化を対象とするとき、その課題は大きなものとなる。ミラー、ヘント&ワン (Miller, Hengst & Wang, 2003) は、アメリカの中流の家族と台湾の中流の家族の幼い子どもをめぐる家族内の物語を質的に比較している。特に、台湾では子どもの誤った行動をよく取り上げ、子どものしつけの機会とするのに対して、アメリカでは子どものよい行動を取り上げることが多く、誤った行動を取り上げても、それをさほど悪いものでないと軽くしていくことが見いだされた。インタビューと合わせて、アメリカの中流の文化において、子どもの「自尊感情 (self-esteem)」を子育ての核として重視していることが示唆された。第二の研究で、台湾とアメリカの農村地域の家庭での母親にインタビューを行った。自尊感情(ないしその類語)をアメリカの母親は使ったが、台湾の母親はあまり使わなかった。使う場合の文脈を比較すると、アメリカでは自尊感情は心理的な強みとして見なされていたが、台湾では適度な自尊感情がよく、高いことは弱さであると見なされていた。

ここでは、自尊感情という心理学的概念が、実は文化的なものであることが明らかにされ、理論的な新たな位置づけを受けている。また、それは、その概念を重視する文化では、文化の実践者の語りの一部ともなり、信念の重要な核となっている。

実践者の概念のあり方を鮮明にするというのは、文化的な志向を持つ質的な研究の基本となるアプローチであることが分かる。「再詳述法」がそれと異なることを述べているわけではない。ただ、既に当事者である実践者がかなり整合的・体系的な記述の仕方を持つ

ていて、自分たちの核となる概念を提起していることに対して、研究者がどう対応して、現象を記述し、実践者の概念化を吟味するかという問題は、文化的な志向性をもつ研究の一方法であっても、独自性を持つのである。

なお、再詳述法は、現象学的還元といった世界への根本的な見直しを目指すものではない。あくまで、実践者の用いる概念の体系と研究者の体系を重ね合わせつつ、鍵となる概念を実際の活動に即して、再吟味しようとするものである。

5 他の方法から学ぶもの

研究者として「鑑識家」として現象の優れた点を見だしていけることが最も大事だし、それは芸術と同様に、質的研究でも成り立つことだと、アイズナー (Eisner, 1998) は主張する。つまり、当該の現象や現場に馴染み、現場の実践者と目を同じくしつつ、高めていけることとして言い換えてよかろう。その現状を理論的な言語で記述出来るようになる前に、それを見て了解し、価値づけられる「目」が必要であると言うのである。そのためには、現場の研究者として十分な時間を現場に過ごし、感覚を実践者に近づけつつ、より質の高いものに接し、また質の高さへの方向性を感受できることが必要になる。

だが、その鑑識眼は一定の見方を前提として成り立つ。だとすれば、特定の「流派」の「スタイル」の中の洗練に向かいやすい傾向があるであろう。それは実際に芸術活動に見られることであるし、保育・教育等の現場でも時に指摘される流派性という問題点でもある。とすれば、その見方自体を広げるにはどうしたらよいか。理論的な指向性を持ち込むことは不可欠であろう。見方を広げるためにはその現場だけのあるいはそのスタイルだけに閉じるのではなく、いわばその外から新たな概念を入れ込むことが鍵となる。

この点で、グラウンデッド・セオリー (grounded theory) における「理論的感受性 (theoretical sensitivity)」の考え方の展開が参考になる。グラウンデッド・セオリーにおいては、データのカテゴリー化

からいかに統合的な理論を得るかが一つの大きな課題である。単純にボトムアップに理論が生成されると楽観的に信奉することは難しい。ヘンウッド&ピジョン (Henwood & Pidgeon, 2003) は、理論的な感受性に加えて、多種類の理論的なリソースからヒントを得つつ、データからのヒントを重ね合わせて、新たな理論を構築していくのだと指摘する。例えば、彼らの研究では、ウェールズの木々・森への信念をフォーカス・グループ法により調べ、先行する研究や理念として、文化への解釈論的立場、行為者の知識への理論的感受性、森やウェールズの文化についての専門家による知識や制度に関わる知識、既存の環境評価の研究、環境と文化とアイデンティティとの関連についての理論化、研究者自身の立場と背景などを用いている。多様なリソースが用いられているあたりに、古典的なグラウンデッド・セオリーとの違いは明らかである。ただし、再詳述法で強調するところの実践者自身の理論と研究者の理論の重なりについては触れていないことに注意されたい。

ここで、再詳述法の特徴を整理しておきたい。

- 1) 理論志向である。
- 2) 理論は実践者と研究者の相互の協同の中に維持されているとする。
- 3) 現象の記述のあり方に焦点を当てる。
- 4) 特定の見方の変革を目指す。
- 5) 特定の現象に即する。

ここから、当該の記述の対象となる現場や現象を越えた一般化を理論的に主張する。その一般化はその概念自体が担っている。概念は、それが当てはまる現象の範囲を想定している。その概念の変更は、今対象としている現象の見直しと共に、その対象の現象を含む活動と場の一般的なあり方への見方を再考させることになる。だが、その一般化は、実践者や研究者が概念を用語に具体化させて、用いるその当事者としてのあり方と離れて成り立つわけではない。その関連を見いだすこと自体が、実践者と研究者のなすべき課題なのである。ただ、概念化を通して、その概念が示唆する方向を見て取ることが出来るようになるのだが、新たな場でその概念が何を指し示し、何を示唆するかは、

その都度、創造的に解決されるべき課題である。と同時に、日常的ルーティン化と制度化を通して、概念と現象の関係は固定化されていき、いずれ新たな見直しを必要とする時期まで安定していこう。どの程度当てはまるか自体、研究者が確定するわけではなく、実践者によって確認されるべき課題として提示される。

6 再詳述法の生成的展開

現象はその中で安定して存在しているのではなく、時間的に展開し、そこでは新たなものが常に生成されている。概念化することはその流れを留め、静止させる。生成的な中に再度、概念を位置づけ、検討する必要がある。

再詳述することは、現象のただ中において経験をしていきつつ、概念を再検討していくことである。その結果としての新たな概念はその生成的なあり方を反映していくはずであるが、なお静止的でもある。生成的なあり方に取り組む中で、概念は、典型となる可能性を2つ持つのではないか。一つは、新たなものを生み出す生成的概念装置としてである。もう一つは、いくつかの極を持つような背反性を含んで、その間の揺らぎと緊張としてとらえるものである。これらの実際のデータ記述に即した展開は今後の課題となる。

引用文献

- Denzin, N., & Lincoln, Y. (2000). The discipline and practice of qualitative research. In N. Denzin, & Y. Lincoln (Eds.), *Handbook of qualitative research* (2nd ed., pp.1-28). Thousand Oaks, CA: Sage.
- Eisner, E. (1998). *The enlightened eye: Qualitative inquiry and the enhancement of educational practice*. Englewood Cliffs, NJ: Prentice Hall.
- Eisner, E. (2003). Art and science of qualitative research. In P.M. Camic, J.E. Rhodes, & L. Yardley (Eds.), *Qualitative research in psychology: Expanding perspectives in methodology and design* (pp.17-29). Washington, DC: American Psychological Association.
- Hammersley, M. (1989). *The dilemma of qualitative*

method: Herbert Blumer and the Chicago tradition. London: Routledge.

- Henwood, K., & Pidgeon, N. (2003). Grounded theory in psychological research. In P.M. Camic, J.E. Rhodes, & L. Yardley (Eds.), *Qualitative research in psychology: Expanding perspectives in methodology and design* (pp.131-155). Washington, DC: American Psychological Association.
- Miller, P.J., Hengst, J.A., & Wang, S-h. (2003). Ethnographic methods: Applications from developmental cultural psychology. In P.M. Camic, J.E. Rhodes, & L. Yardley (Eds.), *Qualitative research in psychology: Expanding perspectives in methodology and design* (pp.219-242). Washington, DC: American Psychological Association.
- 無藤 隆. (1997). 協同するからだことば. 東京: 金子書房.
- 無藤 隆. (2003). 保育学研究の現状と展望. 教育学研究, 70, 363-400.
- 無藤 隆 (監修). (2004). 幼児教育ハンドブック. 東京: お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター.
- 無藤 隆・やまだようこ・麻生 武・南 博文・サトウタツヤ. (編). (2004). ワードマップ質的心理学. 東京: 新曜社.

(2004.9.28 受稿, 2004.12.16 受理)